

長崎街道沿いの烽火台

服部, 英雄
くまもと文学・歴史館 : 館長

<https://hdl.handle.net/2324/2928253>

出版情報 : 佐賀県文化財調査報告書. 226, pp.227-234, 2020-03. 佐賀県教育委員会
バージョン :
権利関係 :



第六章

長崎街道沿いの烽火台

第六章 長崎街道沿いの烽火台

近世の肥前には長崎・烽火山から佐賀鍋島領に伝達される烽があった。ほかに琴ノ尾岳から大村領内に伝達される烽（『大村郷村記』）もあった。他にも平戸藩領内の烽や、藩以外にも捕鯨に利用される烽など多数があった。以下では長崎街道沿いの佐賀領・烽について述べる。

（一）古代と近世の烽火

古代の肥前国風土記に烽式拾所とあって、各郡ごとに所在の数が書かれている。

養父郡一 神埼郡一 小城郡一 松浦郡八（褶振峯） 藤津郡一 彼杵郡三 高来郡五
烽の所在なし・基肆郡・杵島郡

近世の佐賀藩が使用した烽（烽火・狼煙）のうち、文献により明確な朝日山（養父郡、日隈ともいった）、日ノ隈山（神埼郡）の二つは、郡所在の烽火台の数が古代の『風土記』記載も各一で一致する。古代西海道の道筋に近く、古代以来の使用と推定される。古代烽は東シナ海に直面する野母崎や松浦郡沿岸から肥前国庁へ、そしてさらに大宰府に継ぐものであったから、近世の東シナ海沿岸から長崎奉行所、そこより背後の烽火山を経て、佐賀城下、あるいは福岡城下に連絡する経路に一致する部分があった。

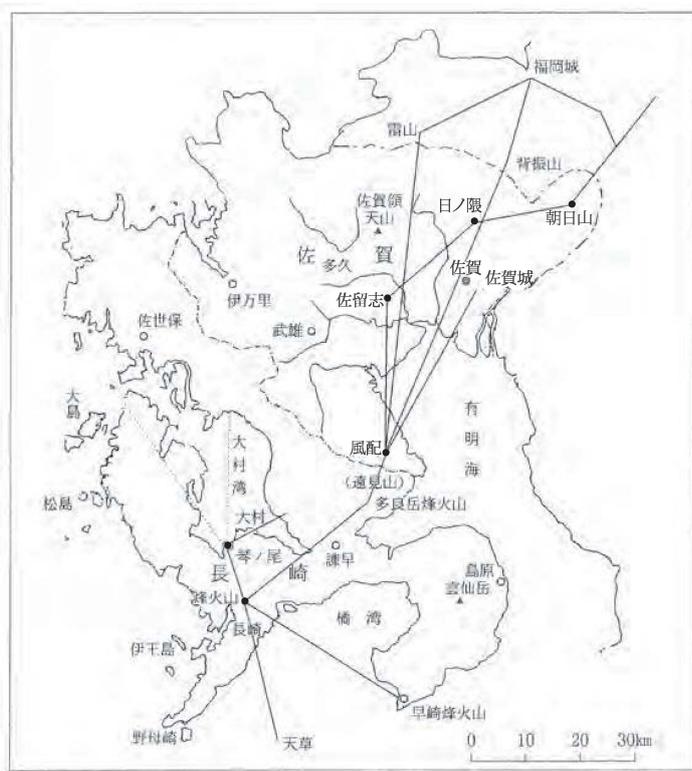
小城郡一、藤津郡一とある。小城郡の古代烽は両子山（三三八m）所在とされている（岩波古典文学大系『風土記』など）。しかし両子山だとさ

れる嬢子山を『風土記』は杵島郡とする。

佐留志に近世烽があった。佐留志は杵島郡である。候補地が二ヶ所あって、以下に述べる御用場は小城郡界に隣接するが杵島郡で、もう一ヶ所は両郡の郡境にあったから、小城郡所屬ともいえる（*小城郡と杵島郡の郡界は昭和になっても江口・正徳が牛津町砥川から江北町惣領分になるなど変更があった）。

藤津郡は風早を指すのなら、古代・近世に共通する（『太良町誌』はもう一つの説として、大浦道越「日の辻山」も紹介する）。

近世の烽場には遠目金や望管などが装備されていた（『烽火山日記』ほか）。よって烽間の距離が伸びて、烽の数も減少したように思われるが、そうではなく、基本はあくまで視認であって、相互の視認が可能な距離は、古代



も近世も変わらなかった。

配置された人員は古代には烽長二名、烽子四人であった（烽長は烽全体の管理者か）。近世の場合は亀井昭陽『烽山日記』によれば、福岡藩では各烽に烽子三人（昭陽もその一人）、他に烽僕一人、烽隸一人が配置されていた。

なお狼煙番人・加番人には、士分ではなく、烽火山のある山が所在する村の村人があつた（後述文化一二年（一八三〇）記事・多良岳小峰・風早には湯江村・糸岐村がそれぞれあたる）。彼らが烽僕・烽隸に相当すると思われる。

任務遂行に必要な人員は、古代と近世とで若干の差はあるが、極端に異なるものではないから、古代も近世も烽の規模、つまり視認できる煙の大きさは同程度であろうと推測できる。

（二）くりかえされる烽

烽は運営維持に莫大な経費がかつた。よつて軍事的緊張がなくなれば、使われなくなる。烽が機能しない時は、白帆注進は徒歩（走行）での連絡とした。光通信たる烽を使わないときは、使者が交代で走つた。三里飛脚は一時（二時間）に三里（二二km）を走り（時速六km）、無時走りは三里を六時で走つたとある（時速一〇km）。無時走りも通信（引き継ぎ）であつて、走者は交代したはずである。

以下・仮年表を参照しながら、休止・復活の繰り返しを見ておく。

寛永一五年（一六三九） 島原の乱後に、野母村・日野山、権現山に遠見番所、長崎村斧山に烽火所を置く。

万治二年（一六五九） 遠見番を置く。

寛文四年（一六六四） 烽火を取りやめる（『吉茂公譜』一八八頁）

享保四（一七一九） 烽の再設置に向けて調査開始。この間は廃止されていた。

明和元年（一七六四）二月、烽火番を廃止。

寛政元年（一七八九） 多良岳烽火について巡見使が尋ね、烽火山であると回答があつた（『巡見録』長崎県地方史だより。山部淳報告）。

寛政四年（一七九二）より以前 五ヶ所狼煙場・風早山、筒名岳・佐留志山ノ上、日隈山・岩田ノ上、朝日山・安郎ノ上（『佐嘉繁盛記』）

文化五年（一八〇八）八月フェートン号事件（長崎奉行自決・佐賀藩主閉門、家老切腹）

同年一〇月 ふたたび烽火山番所を置く。

文化六年（一八〇九）正月および四月に烽火山に烽火を試揚する。

文化六〇七（一八〇九）年、福岡藩烽火番を置く（『烽山日記』）。

文化八年湯江小峰で野焼きのため二〇日間、烽を停止（『諫早日記』二月七日条、上掲・山部淳報告）

文化一二年（一八一五）湯江村庄屋・糸岐村庄屋、烽所番人・加番人手

当下付願、一人一日赤米五合（上掲・山部淳報告所引ふすま裏文書）。

文化一二年（一八一五）一〇月、烽を廃す。

天保八年（一八三七）白帆注進に変えた（『諫早市史』二二三九頁）。

享保四（一七一九）の記録『吉茂公譜』に以下のようにある。

烽を使用すれば、二四時（四八時間、二日）で江戸に通達できる。それで江戸より照会があつた。しかし烽は寛文四年（一六六四）ごろに取りやめになつている。多良嶽がのろし山とは知らなかつた。地元の人たちも全然知らないといつていた。多良嶽から雷嶽、脊振山から雷嶽への見渡しについて調査指示があつたので、現地へ赴き、山型も参照して下絵を作成し、老中大久保下野守（常春）に届けた。

享保には過去の烽火が全く忘れられていたことがわかる。文化五年（一八〇八）フェートン号事件で藩主が閉門、家老が切腹という事態になって、緊張が走った。各藩も本腰を入れて烽を再整備した。

松尾禎作氏が紹介した史料（徴古館所蔵『佐賀藩政時代諸控文書抜書留書』第四卷）中の二点をみよう（紅露生『非常時警報機関としての幕末九州烽火台』、紅露生＝松尾禎作）。重要箇所を口語訳する。

A 鍋島寛太夫ほか七人から米倉権兵衛ら三名（長崎警備に当たっている佐賀藩士か）に宛てた（文化五年）十一月三日の書状

御領内の烽火を手当する場所について検討した。やはりまず最初に内輪限り（佐賀藩だけ）の実験を試してみなければどうにもならないということ、先に決定していた多良岳の（尾ばへ）「小峰」と朝日山の二カ所（*この二カ所は他領から、および他領への受け継ぎとして既に長崎奉行・福岡藩と協議し決定済みであった）を取り繋ぐ山として、筒名山と岩田村の火ノ隈山に手配をした（このことは先に連絡したとおり）。このつなぎの両所にも、それぞれ高さ一丈（三m）余り、四方二間（三・六m）ずつに薪・柴等を積み立て、去月（十月）二十二日昼夜両度に亘って（四つの山で）焚き試しを行ってみた。朝日山・多良岳、そして御城下の三カ所で遠見を試してみたところ、折節天気も良く、昼も夜も一応見取ることができた。もつとも（我々も見た）城下からの見取りについては筒名山・火ノ隈山はそれほど遠い山でもないのに、昼は煙ばかりが見え（*「煙斗相見え」とあるから、煙以外の色・本数などが要求されていたものか）、夜の火もようやく一抱き程だった（二ないし三の本数の認知が要求されていたものか）。多良岳・朝日山はなおさら遠い場所だ。出向いていった担当者たちはかすかで、たよりないものだったといっていた。実験では前々からの規

定に書いてあるとおりの分量に薪を積んだはずなのに、こんなわずかな火とは。天気が良くてもこれでは、雨や霧の時は行き届かないかもしれないと思う。だが、晴天であれば「可也」（かなり）届くことも確認できた。着任された曲淵様の用人から、試し焚きをするよう命令されるはずだから、筑前の担当役人達とも「得と」連絡を取っておくように（下略）。

『追而書』

長崎放火（烽火）山では薪の積み方は何とおりのほどあるのか、焚き方も特別のやり方があるのか、昼の燃やし方と夜の焚き方とで違いがあるのか、そのことを聞き合わせてほしい。この前の内々の予行演習では昼は八時半（午後三時）、夜は暮れ六時半（午後七時）だった。元の火（長崎放火山）は焚く時間も決まっておらず、先方に伝達すればそれで終わるわけで、一昼夜焚き続けるわけではないから、練習といってもきちんと（決められたとおりの分量を燃やすなど）すべきだと思っただが……。とにかく振れ合い（方向か）など綿密に相談してほしい。なお三笠郡天山（朝日山の火を受けとる筑前側の山＝天山集落東の出崎、宮地岳の一角、南方）の方位について尋ねられたが、方向は丑（北北東）にあたり、里数は三里半余りにある小粒山である。近々そのあたりで筑前藩でも内々の試し焚きをするということを知っている。そのことも承知していただく。

B 肥前の烽火（放火）掛から、筑前側の受け継ぎの天山烽火台のある原田代官に宛てた（文化六年）正月二十日の書状

そちら様（筑前側）も御当番ご苦労さまでございます。放火の試し焚きについては我が方（佐賀領）も本日二十日の実施で準備ができています。確認の問い合わせをいただきました。長崎での相談の結果、今日二十日、二十三日、二十五日の三日の間に一回行うことになっており、佐賀からも指令が来ています。わが方では今日二十日申の上刻（午後四時）、養父郡朝日山で揚げます。長崎放火山の「御揚試」は申の上刻と酉の上刻（午後

六時)の昼・夜の二度行います。ただし佐賀領内での「移取」の末(最後)になる朝日山から、あなたさまの(筑前)三笠郡天山にさらに延長して「移合」わす件については、きちんと決めておらず、連絡しておりませんでした。しかし佐賀城より指示がありましたので、筑前にまで延長する手はずをいたします。

また朝日山の放火の場所についてお尋ねですが、この山は小粒山なので左右の見極めが難しく、最初は山の頂上と決めていましたが、あなた様の放火場が天(山)の東の出崎になっておりますから、その見込みですと、中腹(から揚げること)になると思います。きちんと佐賀城と相談してお答えすべきですが、(今日の実施で)もう間に合いませんのでとりあえず連絡します。ほかのことは後から連絡します。

この後、文化六年(一八〇九)に亀井昭陽らが福岡藩の烽に従事した。亀井昭陽は福岡藩の儒者で、藩内抗争と甘棠館廃校ともない免官、この時に烽火番となった。六岳、淘籬岳(しょうげごえ)、天山・四王寺山・石峰・龍王嶽の諸山に登り、烽火番の任につき、記録『烽山日記』を著した。

(三) 佐賀県内・長崎街道沿いの烽火山

次に県内の烽火山の現状を報告する。

A 風早

史料上「高木郡風早」とするものがある。高木郡(高来郡)なら長崎県内だが、久保山氏の論考では

藤津郡多良村、長崎街道粒露坂上方の烽火山

『諫早市史』では

藤津郡多良村風配球露峠直上とある。

藤津郡太良町烽火山については平成十一年ごろに長崎県教委の歴史の道・長崎街道調査時に湯江小峰とともに調査をしたことがある。小長井町古賀木場鳥越の中島忠氏、太良町船倉の大岡峯広氏夫人、同広谷の宮崎崇義氏から聞き取りを行った。

標高五一八mの山をカザハヤと呼ぶ。湯江小峰の火を受ける。粒露坂については今日小字風早となつているところを、以前は「ツプロゴ」だったとのこと、字は「粒呂川」だろうとのことだった。現在の太良町小字図には見えないが、角川日本地名大辞典・佐賀県・巻末小字一覽には「粒口川」とある。ツプロ川はツプロを流れている川で、ツプロ坂はそこにいたる坂であろうから、現在の風早に登る北の坂ということになる。近世史料に出てくる烽火山「風早」も、久保論文・『諫早市史』の山も、この山である。『太良町誌』には一辺二五m四方の石積みが見られるとあるが、宮崎氏は頂上には何もないとする(『長崎県地方史だより』)。山部淳報告では井崎氏よりの聞き取りとして、むかしは相撲の土俵のような形であったと報告しているが、現況では確認できないとしている。

風早の烽火台は多良岳烽火台(湯江小峰・多良岳尾ばへ小峰)から火受けした。尾ばへは「うーばえ」で山麓・中腹の意味である。標高四六二mの山に遺構があつて、高来町教育委員会が道標を立てている。国土地理院地図に烽火山の記載があるが(五五四・三m)、多良岳小峰烽火台はその東にあつて、山頂より一〇〇mほど低い(野中氏『小峰烽火山探訪記』史談あれこれ)。

小峰と風早間の距離はわずか六km弱に過ぎない。風早から佐留志に伝達した。その間は二八km。この距離は長崎―多良岳小峰間と同等である。佐賀城内との直線距離は三八kmになる。佐賀城内にも遠見があつた。

山麓の尾崎東分には台場（ジャーバ）と呼ばれる場所があって、射撃の訓練所であった（石火矢頭留書）。アームストロング砲の試射も行われている。

烽火台への兵員配置に関しては近接地に軍事施設があることは有益であったと考えられ、朝日山の訓練場とも共通しよう。

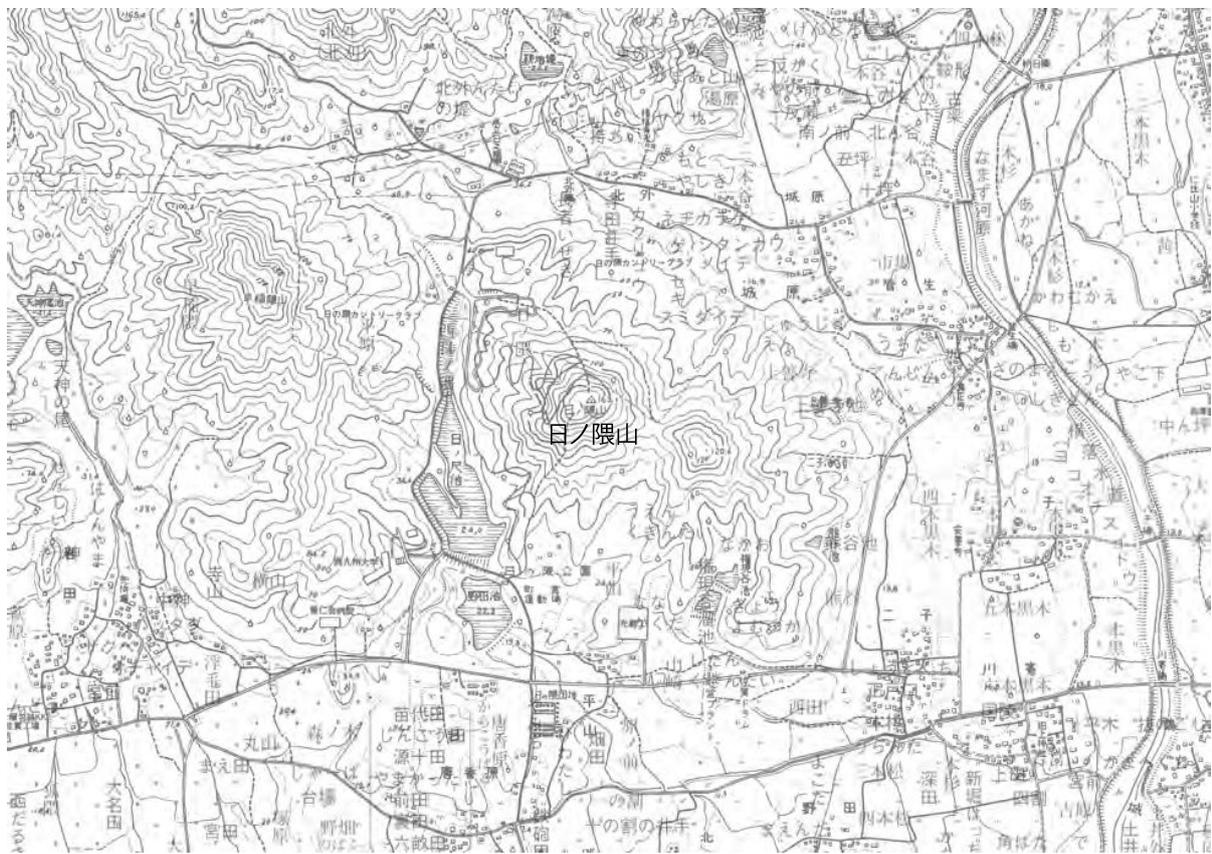
D 養父郡朝日山（安良・幸津）

松尾禎作「山烽について」（鳥栖市『郷土資料』）によれば、麓村小楠、原古賀の氏神社に、朝日山日隈権現が合祀されている。朝日山北東の麓、二・三合目に日隈権現旧地があって、竹林のなかに杉が五・六本生えており、車窓からも見えるとしている。福岡県糸島郡火山にも烽火神社が祀ってあって、類似の性格だとしている。烽自体のあとは見つけられない、公園造成時に地形が変わったかもしれないとする。

小字名は「日隈」（ヒノクマ）である。この山も元来は「日隈山」だった。中世の朝日山城があった山の頂部からは、東は筑前天山、西は神埼郡日ノ隈山に見通しがきく。頂部に烽火台があったと考えられる。しかし先の古文書では、天山との火受けには中腹がよいと書いてあった。背後が明るい空よりは黒い山の方が見やすいとはいえる。

烽の遺構らしいものはないが、城跡で平坦地はある。東方に貯水池とされるくぼ地があって、公園整備されている。あるいは遺構を継承するものなのか。見当がつかない。麓には訓練場と称される場所があるが（ゴルフ場横）、平坦地ではなく、斜面地である。

山麓に湧水池がいくつかあって、池もあった（陶山雅志氏ほかより）。



出典：服部『二千人が七百の村で聞き取った二万の地名、しこ名—佐賀平野の歴史地名地図稿一』（神崎町北部）

参考文献

- 紅露生「非常時警報機関としての幕末北九州烽火台 朝日山烽火掛合文書の研究」〔『肥前史談』一〇一、二、一九三七〕、
紅露生氏は松尾氏のペンネーム（久保山論文）。
久保山善映「九州における上代国防施設と烽火の遺蹟」〔『肥前史談』一三二、一、一九三九〕
松尾禎作「山烽について 黒船来襲？のレーダー的役割」（鳥栖市『郷土資料』一九五六）
山部淳〔『長崎県地方史だより』〕
諫早市史（一九五五）
太良町誌（一九九四）
長崎御番に掛り候書類（佐賀県立図書館所蔵）
服部英雄「飛脚簿によせて」「景観にさぐる中世」（一九九五）
服部英雄「中世・近世に使われた「のろし」『烽（とぶひ）の道』一九九七、青木書店 一八三―二一四頁・所収
服部英雄「長崎街道沿いの烽火」長崎県歴史の道（長崎街道）調査事業報告書 長崎県教育委員会（二〇〇〇）
服部英雄「古代中世の長崎街道 烽火台にみる長崎街道の軍事的側面 亀井昭陽『烽火山日記』および古代烽」福岡県教育委員会『長崎街道』福岡県文化財調査報告書一八四（二〇〇三年三月刊）五―六頁、二二七―二三二頁



出典：服部『二千人が七百の村で聞き取った二万の地名、しこ名一佐賀平野の歴史地名地図稿一』（78 鳥栖市1 79 鳥栖市2）